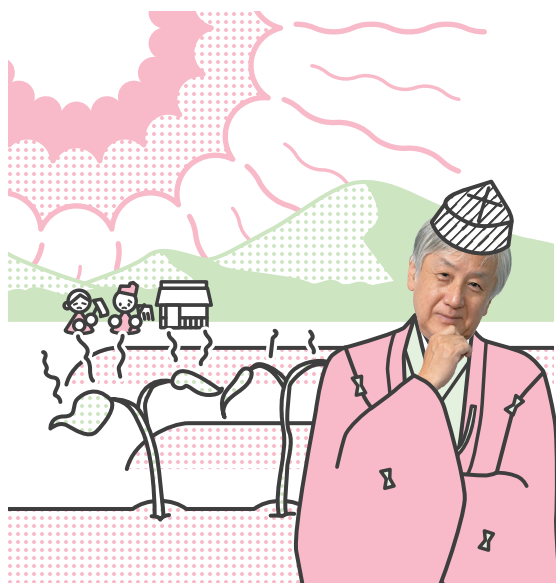


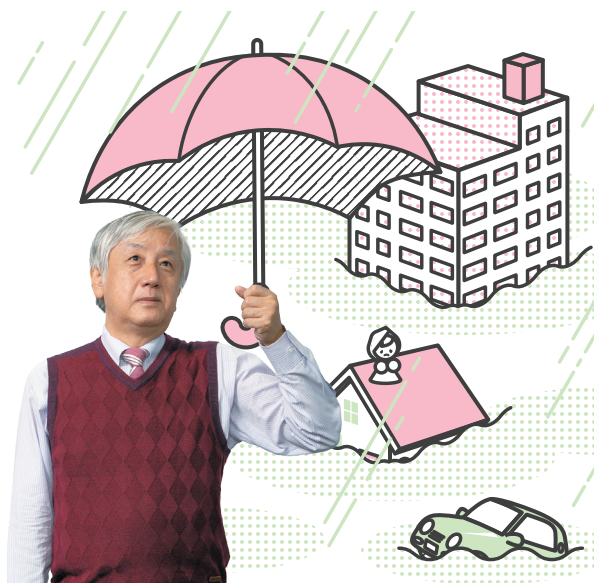
Q 歴史や社会の動向に、気候変動は関係していますか？

A 水害や干害といった気候変動が古くから続く制度に影響を与えた可能性があります。



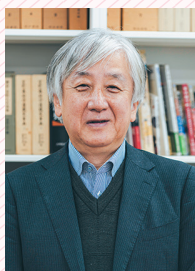
荘園が衰退へと向かう引き金となった水害、干害との関連性を研究。

奈良時代から始まった荘園制度。公家や寺社、武家など、支配層の私有地である荘園を基盤に土地を管理することで、人民に年貢を納めさせるなど国の財政や社会全体の核を成す制度として広まりました。私は主に中世後期の日本史研究を通じて、日本の荘園に焦点を当てて研究をしています。例えば荘園制度が解体した誘因として、武士の台頭や武士による侵略が挙げられますが、真の理由は他にあるかもしれません。そこで着目したのが気候変動との関連性です。室町期の1420年から30年にかけて荘園制度は激動の時代を迎え、衰退の一途を辿るのですが、時を同じくして長雨や干ばつなど厳しい気候状況が続いたことがわかっています。干害により田畑が荒れ、水害によって用水路が壊れるなど、各地での甚大な被害が荘園制度崩壊の引き金になったと考えることができます。



室町期を超える気候変動にさらされる現代。過去から学び未来に備える。

研究が大きく前進するきっかけとして、総合地球環境学研究所の中塚武先生による古気候学との出会いがあります。木の年輪から当時の降水量を1年単位で解明する先生の研究結果と照合することで、降水量の激しいアップダウンに比例するように田畑や農作物がダメージを受け、農村が疲弊していったという説を裏付けることができます。こうした気候変動が社会情勢にもたらす影響は、現代にも置き換えることができます。近年頻発する水害、世界で起きている干害など、室町期をはるかに超える大きな環境変化に私たちは今さらされています。テクノロジーや医学の発達など、どれほど世の中が進化しようとも、人間は過去と同様の事態に直面し、同じ経験を繰り返すのです。歴史を学ぶことは、未来をイメージし、来たる時に備えることにもつながるのです。



伊藤 俊一 先生

Ito Toshikazu

中学生の頃、歴史好きだった友人の影響で新幹線の「こだま」に乗り、4~5人のグループで何度も京都を訪れたことが日本史との接点に。荘園の故地調査や古戦場跡などを訪れ、タイムトリップ気分に入れるのが歴史を学ぶ醍醐味です。

お気に入りのアイテム



折り畳み自転車

荘園の調査や史跡巡りの時の相棒です。新幹線に乗る時にも、折り畳んでバッグに収納して現地に持参することができます。遠出する時には現地で自転車をレンタルすることも。自転車とカメラは手放せません。